

お湯と交換した一本の木

これも薩摩の国の遠い昔のおはなしです。

今では知覧と呼ばれているところにある日、突然、とつぜん手でさわることもできないほど、たいそう熱いお湯がわき出してきたところがあったそうです。村人たちはこの熱いお湯のせいで大変こまっていました。

というのも このお湯が湧き出たところには 村人たちが生きていくために必要な米ひつよう作りの場所があったからです。このままではその熱いお湯のせいで米作りができなくなるのではないかと心配しました。

そして、村人たちがあつまって話し合いをしていたある日のこと、一人の旅のお坊さんがとおりかかり「みなさん何か困ったことでもおきましたかの」としたしげに声をか

けてきました。村人たちは、はじめは疑い深そうにしておりましたが、人をだますような悪い坊さんにはみえなかつたので、その熱いお湯のせいで村人たちがこまっていることを話しました。

話を聞いたお坊さんは「そんなにこまっておられるんじやったらわしにも一つお手伝いさせてくれんかの」とにこにこした顔でいいました。

村人たちは「このお坊さんに何ができるんだらうか」と思いながら顔を見合わせていきました。そのとき、村おさが「お坊さん何かよい知恵もおありですか、あつたらぜひ教えてください」とたずねました。

するとお坊さんは「わしにいい考えがあるのじやが、あすの朝、村の衆、ここに集まっ

てもらえんかのオ」と答えました。

そこで村おさは 村人たちに「今日はこのお坊さんの云うことを信じてあすの朝 来たここに集まることにしてはどうじゃ」といいました 村人たちは「村おさがそう云うんだったら そうすることにするか」と口をそろえていきました それを聞いたお坊さんは ていねいにおじぎをしてまたどこかにたちさつていきました

それから しばらくのあいだ村人たちはその熱いお湯のわき出るところをうらめしそうにながめていましたが やがて家に帰っていきました

夜が明けて 朝がきました 村人たちは朝早くから あつまつてきのうのお坊さんが来るのを今か今かとまちわびていました そこへ どこからともなく きのうのお坊さ

んが「穏やかな笑みを浮かべ やあ やあ みなさんおあつまりじゃの」と云いながら  
ひよっこりあらわれ 村人たちに「みなさんは、ほんとうに このこのお湯がなく  
なつてもええんじゃの」とききました 村人たちは 口をそろえて「ええんじゃええん  
じゃ」とこたえました

するとお坊さんはお湯の湧き出るところを指さして「エイ」と大きな声で叫んだかと  
おもったら 今度はその指を遠くの方に向け 「お湯さんよ お湯さんよ わしの指さす  
方へ飛んで行ってくれ」といいました するとみるみるうちにお坊さんの指さした方  
に白いかたまりが飛んで行くではありませんか しばらくして 村人たちがお湯のわき  
出ていたところを見ると そこにはもうお湯は消え水が流れ何やら一本の木が立って

いました

突然のことにびっくりした村人たちは お坊さんにお礼を云うのも忘れてポーツとしていましたが 不思議に思った 村おさは「お坊さん この木はいったい何の木ですか」

とたずねました お坊さんはニッコリと笑いながら「この木をみんなで大切に育ててください きっといつか村のためになる木になるはずじゃ」とこたえました

そして またどこかへたちさつて行きました

それから村人たちは お坊さんのおかげで何の心配もなく米作りができるようになり安心してくらすようになりました

しかし あの時お坊さんがお湯の代わりにくれた木を大切に育ててきましたが 何年

たつてもおいしげるばかりでいっこうに村の役に立つ気配いはありませんでした

そして だんだんとお坊さんの恩を忘れ「あの坊さん お湯は水にしてくれたけど

この木を大切に育てたら村の役に立つといったのはうそだったな」とうわさするように

なり そのうち 村人たちもだれ一人としてその木を育てる者はいなくなりました

ただ一人 村おさだけはその木を大切に育てていました

そんなある日のこと 村人の一人が誰もいないのを見はからって「この木はなんにも

ならん じやまな木じゃ」といってバツサリ切ってしまい それを焼いてしまいました

それとはしらず いつものように村おさが木を見にやってきました そして木が切ら

れ焼かれているのを見てびっくりした村おさは 村人たちを集めて「いったい誰がこの

木を切ったのか」とひどくおこって問いただしました

しかし みんな「あの木はなんもならん木じゃ だれが切ったって知ったことじゃない」と思っていたので 口々に「わしは知らんよ」といいました

がっかりした村おさは あの時、村を助けてくれたお坊さんに「申しわけないことをしてしまった」と焼け残った木の葉を持って帰り、それを両手に包んで何回も何回も心からわび続けました。ふと気が付くと 手の中に木の葉が 細く長くなって残っていました。村おさは思いました「もしかしたらこれはあの熱いお湯と入れ代わった木の葉だからお湯の中に入れてみよう」と、さっそく女房を呼んでお湯をわかしてその中に入れてみました すると何ともいえない良い香りがしてきました。



今度はそれをおそるおそる飲んでみると、これがまた何ともいえない良い味がするではありませんか。二杯三杯のむうちにすっかり今までのはりつめた気持ちごとれ、平和な気分になってきました。数日間飲み続けてすっかり疲れがとれた村おさは「あのお坊さんが云っていたことは、このことではなかったのか」とあらためてお坊さんの徳の深さに感心しました。

そして、そのことに気付いた村おさは、村人全員を集めてことのしだいを話し、同じように飲ませてやりました。村人たちはすっかり感激して、あのとのお坊さんに深く感謝しました。それからバツサリ切り取られてしまった木をみんなで育てなおすことにしました。村人たちがいっしょうけんめいに育てたおかげで、木はすっかり元気にな

り花を咲かせ やがて実がなりたくさんの木が生まれました それが今の知覧茶の木に  
なったというはなしです

その後 お坊さんが「エイ」と叫んで振り向いたあたりを「顯娃」指をさしてお湯を  
飛ばしたあたりを「指宿」と呼ぶようになったということす

知覧のお茶は温泉と交換した大切なものだから大事に育てんといかんといわれている  
そうです

ちなみにお湯が湧き出ていたところは今もその名残が湯の谷と言う名で残っていると  
のことす

創作者 きがき 寛 かん

問合せ 08083813384